

2018年度 伊野地区自治協会 活動の総括

2019,3,24 伊野地区自治協会代議員会

<全体総括>

伊野のまちづくりを考える議論が大きな盛り上がりを見せた1年であった。伊野ビジョン・ムービーを使ったまちづくりトークが各種団体や町内会で展開され、たくさんの意見が出された。住民の声を地区を挙げての議論に展開するため、まちづくりフォーラムを3回開催したところ、毎回多くの人びとが足を運んでくれた。フォーラムの中から、具体的な取組を始めようとするグループが4つ生まれ、活動を開始した。

今年度から島根県の中山間地域現場支援地区に指定されたこともあり、行政の積極的な支援があったことも特筆しておきたい。

また、これまでの取組、とりわけ地域と学校が一体となったまちづくりが高く評価され、「あしたの日本を創る協会」等が主催する「あしたのまち・くらしづくり活動賞」で総務大臣賞を受賞した。

視察研修に伊野を訪れたのは3団体（雲南市海潮地区、隠岐の島町小原田地区、広島県庄原市北自治振興会）。伊野の取組が評価され、注目度を高めている。

10年後の伊野ビジョン作成はならなかったが、この1年間で醸成されたエネルギーをもとに来年度はビジョンを完成させることに併せ、ビジョンに近づく新たな活動を展開したい。

<分野別総括>

みんなで考えよう「10年後の伊野」ビジョン

1 伊野ビジョン・ムービーを活用したまちづくりトーク

4～7月にかけて8団体、14町内で伊野ビジョン・ムービーを上映し、感想・意見交換を行った。予想をはるかに超える意見が出され、伊野の深刻な状況が浮きぼりになった。住民のみなさんが、伊野の魅力や困りごとを声に出したということが貴重な成果であった。

2 まちづくりフォーラム開催

まちづくりトークで出された声を地域のみんで共有することと、まちづくりについて考え・動き出すトーキング・グループやワーキング・グループを生み出すことをねらいに、まちづくりトークを3回開催した。7月の第1回フォーラムには約70人、10月の第2回フォーラムには約80人、11月の第3回フォーラムは地区外参加者も多く140人余が参加した。第3回フォーラムは、昨年に続いて山崎亮氏を迎えて、まちづくりを考える視点と具体的な取組事例について学んだ。

フォーラムに1度でも参加した伊野地区住民は130人余人にのぼった。その中には、学生5人を含め若者たちが約10人おり、積極的な発言が参加者に元気と希望を与えた。また、話し合いの中から4つの活動グループ（ちょんぼし伊野いち、福祉・生活を考えるグループ、情報発信グループ、学生グループ）が立ち上がったことは、ビジョン作成とその具現化にとって貴重な財産となった。

3 住民要求調査

調査はできなかったが、まちづくりトークやまちづくりフォーラムを通して多くの声を聴くことができた。今後、ビジョン作成の進展状況に併せて、必要に応じた調査を行う。

4 伊野ビジョン作成に向けた推進体制整備

ビジョン作成の進め方やビジョン骨子について行政スタッフも含めて3回の話し合いを持ったが、プロジェクトチーム等、推進組織結成には至らなかった。

5 子ども・若者・女性のまちづくり参画

フォーラムには伊野の青年・学生が約10人参加し、積極的な発言が話し合いを盛り上げたが、20～40代女性の参加が少なく、今後の課題である。中・高生は伊野ベリオンスタッフとして参加するなど、折につけ、まちづくりに関わるよう努力が続けられている。

6 町内会や各種団体・行事のありようについて検討

まちづくりトークの中で、「役職負担に耐えられない。行事や組織の見直しをしてほしい」という声が数多く挙がったので、検討委員会を立ち上げた。第1回検討委員会では、次年度は環境や交通安全・防犯分野を中心に負担軽減を行うことになった。文化祭や体育祭など大きな行事や組織については長期的展望に立って次年度1年間かけて検討する。

7 伊野の資源一覧表作成

強みを活かしたまちづくりを推進するために、伊野の人や文化、自然等の価値を再発見することが欠かせないが、具体的な取組には至らなかった。

8 「10年後の伊野ビジョン」とまちづくり計画の骨子策定

骨子策定には及ばなかったが、ビジョンに盛り込むべき内容についてはまちづくりトークやまちづくりフォーラムを通して一定の集約ができたので、次年度早々にビジョンの骨子について住民の皆さんに提案できるように準備する。ビジョンは市・県の支援を仰ぎながら2019年度中の完成をめざす。

伊野の教育魅力化

1 伊野小学校&伊野小学校 PTA 支援

地域・学校連絡会議や伊野小学校地域学校運営理事会等を通して、地域・学校連携によるまちづくりや先駆的・創造的教育実践をめざす取組が定着した。

○伊野いち×伊野小学校

伊野いちに参加する5・6年生児童が果たす役割は大きい。ポスターやミニチラシをつくる宣伝活動や、お客様の荷物運び・おもてなしコーナーの配膳等の活動は伊野いちに欠かせない戦力となっている。伊野いちの魅力を問うお客様アンケートでは、新鮮で安い商品、おもてなしコーナーと肩を並べて小学生の活動がベスト3に入っている。

○小規模校の困難支援

運動会前の校庭及び校庭周辺の草取りやプール清掃を手伝うボランティアには多くの地区住民が参加し、定着してきた。労力支援に加え、財政支援はふるさと会員の寄付金により、修学旅行経費補助（2,8000円を超える部分）と卒業アルバム代金（8,000円）を越える部分を助成することができた。

○「町の幸福論」学習支援

前年度に続いて、小学校6年生教科書「町の幸福論」著者；山崎亮氏の出前授業が実現した。町の幸福論を考えた6年生児童の提案は持続可能な伊野を考えるうえで、実に示唆に富むものであった。次年度は、地区住民公開の発表会にしてほしい。

○国際ワークキャンプ×伊野小学校

伊野小の宿泊研修（於サンレイク）と国際ワークキャンプのコラボが2年目を迎え、児童の国際感覚を養う上で貴重な機会となったが、来年度は5・6年生合同の修学旅行が実施される関係で宿泊研修とのコラボはできない。

2 伊野小支援ボランティア活動

伊野小の教育活動を支えるために、読み聞かせや花壇整備・プール監視など多様なボランティア支援が行われている。昨年到现在、高齢者クラブのみなさんによるプール清掃

が行われた。また、新たにミシン指導ボランティアが加わった。

3 地域の子育て事業充実—子どもが育つ5つの舞台—

①伊野バージョン

山を舞台にクイズラリー（5月）、地合海岸海を舞台に赤名小との交流（7月、2年目）、伊野小体育館でダンボール迷路（12月）、そして3月の伊野バージョン卒業式と、計4回実施した。そのほか、伊野バージョン学生たちはスキー教室や国際ワークキャンプ等に参加するなど、伊野の教育魅力化事業にとって欠かせない存在となっている。

伊野バージョンが始まって6年を経過し、伊野バージョンは伊野の代名詞となっているが、子どもの成長と発達にとってどんな役割を果たしてきたのか、伊野のまちづくりにどのような貢献をしたのか、運営方法やねらい等、今後の展開をにらんだ総括が必要な時期を迎えている。

②スポーツ

学校規模を問わず単独でスポーツチーム結成が困難な状況下で、伊野小の女子バレーボール（伊野マリズ）が灘分小児童を加えたチームで、県大会決勝進出を2度果たしたことは地域住民にとっても大きな励みとなった。

そのほかにも、トレイルランやスキー教室など、子どもたちがスポーツに親しむ機会を提供することができた。

③地域を知る活動

ふるさとカルタ大会やクイズラリー、えがもち作りが実施された。こうした活動の積み重ねが、伊野に生きる誇りと愛着を高め、中高大学生のまちづくり参画につながっていることを重視したい。

④国際交流

伊野小の宿泊合宿（於サンレイク）と国際ワークキャンプのコラボにより、小学生3～6年生とキャンパーたちの交流が深まった。

⑤子ども・青年のまちづくり参画

昨年度の伊野小卒業生の発案によるフリーペーパーとクイズラリーが実現した。また、伊野バージョンにスタッフとして中高大学生の参加もあった。小中高大学・青年にいたる一貫した教育プランの策定が求められる。

4 夏休み等長期休業中の子ども預かり

児童館といのっ子教室連携による長期休業中の子ども預かりが始まって3年が経過した。保護者からは好評であるが、ボランティアスタッフの確保や活動内容について検討が必要であろう。また、長期休業以外の日における児童館の子ども預かり時間を延長してほしい、という保護者の要望実現に真剣に取り組む必要がある。

5 伊野の教育プラン作成

伊野の将来ビジョン作成が遅れた関係で着手できなかったが、フォーラムの中では教育問題にしばった話し合いを開催して欲しいという要望もあったので、次年度に保護者と一緒に取り組みたい。

地区外の人びととつながったまちづくり（関係人口拡大）

1 伊野ふるさと会員

ふるさと会員制度が発足して2年目。初年度に課題として残されたコミセンの担当職員の負担軽減は、専従ボランティアの確保により（原田智子さん）実現することができた。

ご寄付を寄せてくれた方は84人、寄付金総額は60万7千円。その中には、日立製作所OBがつくる「親切会」から15万円の寄付が含まれている。寄せられた寄付金は、伊野小学校

修学旅行経費補助、卒業アルバム代補助、小6国語教科書「町の幸福論を考える」著者山崎亮氏の講師謝礼等に充てることができた。

ふるさと会員お帰り企画でビアガーデンを開催したが、会員の参加はわずかであった。還暦や42歳厄年の同窓会の折の伊野めぐりツアーについても希望がなかった。会員の皆さまとの交流のありようや会員のみなさまの力をどのように伊野のまちづくりにつなげるか、検討が求められている。併せて、寄付金を効果的に運用する事務局体制も整備する必要がある。

2 情報発信力の強化

○ SNS 活用による情報発信

17年度に開設した伊野地区自治協会 HP アクセス数は……。更新回数も少ないので、HPの管理と更新を担当するボランティアが欲しい。

○情報発信を行う人材育成

情報発信の必要性はまちづくりフォーラムでも指摘され、原田亨さんを中心に情報発信の勉強会が立ち上がった。情報発信力の強化は次年度の重要な課題である。

3 伊野バージョン OB や他地区・他団体との共同

○伊野バージョンホームカミング（同窓会）

伊野バージョン OB からはホームカミング企画に強い期待が寄せられたが、日程上の理由で実現できなかったが、OB 学生の伊野に対する愛着や現在の職種が持つポテンシャル・情報発信力を重視しなければならない。OB はどんどん増えていくので、10年～20年後を見ずえたまちづくりを進めるための貴重な戦力となることを銘記しておきたい。

○大社町荒木地区や平田商工会議所との連携

平田商工会議所70周年記念イベントの1つ、「人生ゲーム」では、空き店舗を活用して伊野のアンテナショップ（店長・山崎美吉さん）を開催することができた。また、70周年記念講演と伊野地区まちづくりフォーラムの講師に山崎亮氏を共同で迎えることができた。商工会議所との連携により平田地域全体の活性化、広域な視点でのまちづくりを進めたい。

原子力災害時の避難先である荒木地区との交流は5年目を迎えた。今後、避難訓練以外の分野でも両地区の交流を発展させ、顔でつながる関係を広げたい。

伊野暮らし魅力化

1 食と農を楽しむ

○伊野いちの発展

伊野いちが始まって5年が経過し、開催回数は10回に達した。毎回の客数は300～400人で安定し、固定客も着実に増えている。軽トラ市試行という目標は、まちづくりフォーラムの中から生まれた「ちょんぼし伊野いち」がトレイルラン大会（11月11日）と伊野バージョン（12月2日）のイベントに合わせ、開催することができた。機動性が持ち味の「ちょんぼし伊野いち」の発展を考えたい。

○伝統食文化継承

伊野いち実行委員会が昨年度に続いてしば作り講習会を開催し、継承者を増やしている。伊野いちの店頭には昨年を超えるしばが並び、収益拡大に貢献した。えがもちをはじめ、様々な伝統食の発掘は伊野のまちづくりにとって欠かせない。食を考える機会、伝統食を学ぶ機会、情報発信の態勢づくりは、資源（強み）を活用したまちづくりという点で重視したい。

○地域農業を考える研究会

農業の深刻な課題を共有し打開策を考える研究会を立ち上げることを、毎年、取組課題に取り上げているが実現に至っていない。次年度は、伊野ビジョン作成の取組の中で、農業者

の本音の声を聞く会を設け、将来展望をさぐっていきたい。

2 里山・自然を楽しむ

○秋葉山整備

- 島根県「み～もの森」事業を活用して山頂周辺の伐木と管理歩道の整備が完成した。金森・堂ノ本町内がつくる秋葉山委員会や国際ワークキャンプメンバー、出雲市森林組合が作業にあたった。

○りんごん山・十膳山活用

第2回「いの～んびりトレイルラン」大会のコースとして活用した。また、地区外から十膳山に登る人が増え始めたので案内標識を設置した。

3 40周年記念文化祭

餅まき、しまねっこ招待、40年を振り返る記念イベント等、内容が充実したこと、また、抽選券配布に改善を加えたことなどにより、例年より多くの参加者で賑わった。

4 スポーツを楽しむ

○スポーツイベントの見直し

バレーボール大会については体協で検討した結果、来年度からソフトバレーも組み込むことになった。その他のイベントは1年間かけて見直しを図ることになった。

○トレイルラン等新たなスポーツ文化創造

第2回「いの～んびりトレイル・ラン」は参加選手が約120人と前年度（70人）に比べて大幅に増えた。小学生を除くと大半が地区外参加者であった。

5 異文化交流・国際交流

○伊野国際ワークキャンプ

3回目を迎えた今年は、キャンパーの宿泊場所をコミセンに近い川瀬邸に変えた。昨年に続いて伊野小の宿泊研修に合流した。さらに、後日、宿泊研修に参加しなかった学年との交流も伊野小体育館で行い、子どもたちの国際理解教育に貢献した。また、りんごん山と秋葉山の環境保全活動に取り組んだ。

○多文化共生・食文化交流

伊野こみこみサロンが出雲市の国際交流員（ブラジル人女性）を招いた講演会を開催した。国際ワークキャンプで「食」をテーマに開催した若者サミットは好評であり、「参加したかった」という大人の声も寄せられたので、前年度の総括で提案された他地域との食文化交流は挑戦に値する取組である。

コミュニティーの基盤整備

道路・河川インフラ整備

1 第2次「出雲市道路整備10カ年計画」事業推進

○伊野本線「金森・東地合工区」の早期着工

地元の受け皿となる推進委員会（西村亮委員長）が発足し、測量・設計が行われた。東地合工区のルート案について地元との意見交換会が開催された。次年度は東地合工区の詳細設計と地籍調査が行われる予定である。

2 第4期「道路・河川修繕3カ年計画（H29～31）」推進

土木委員会の精緻な調査と行政への働きかけにより、道路10件、河川3件が採択され、今年度は道路3件、河川1件の事業が実施された。次年度は、道路3件、河川2件の事業を実施して事業を終了する。次年度は、第5期計画策定に向けた地元要望の集約を行う。

3 主要地方道・斐川一畑大社線（地合工区）の早期完成

避難道路として重要な路線なので早期完成をめざして地合工区期成同盟会（伊野・東・佐

香)が毎年、行政当局に強い働きかけを行っており、事業は進展しているが、完成年度が明らかにされていないのでスピード感を持った計画推進が求められる。

同路線は平田地域基幹道路建設期成同盟会(会長:大谷平田商工会議所会頭)の課題路線になっており、同盟会による視察が行われた(3月)。

4 伊野川井堰改修

これまでに2基新設、3基を撤去。来年度は、2基新設・2基撤去で事業が完成する予定である。

安心・安全のまちづくり

1 原子力災害対策

○大社町荒木地区への避難・交流

荒木地区との交流は5年目、「3・11メモリアルウォーク」参加は4年目を迎えた。原子力災害時、荒木地区へ避難するのは当地区以外に東・檜山・佐香地区も含まれるので、この3地区も含めた交流の実現が課題である。また、防災以外の分野でも交流を深めたい。

○原子力災害対応の学習会

出雲市が主催するブロック別の学習会10数名が参加した。安定ヨウ素剤配布について東地合から説明を求める要望が出たので、県の担当者を招いた学習会が開催された。

2 土砂災害対策

○土砂災害特別警戒区域指定に関わる住民説明会を4回開催した。

○土砂災害対応避難訓練は実施できなかった。西日本豪雨災害に見舞われ、岡山・広島県では甚大な被害が発生したことを重く受け止め、当地区でも土砂災害に対する防災力を高めるための避難訓練の具体化が求められる。

3 災害時の危機対応

災害弱者(避難行動要支援者等)対策を進めるための、世帯情報更新は行なわなかった。次年度には必ず実施したい。また、伊野地区独自の避難訓練を行って危機対応能力を高めることも急がれる課題である。

4 ファースト・レスポnder、消防団

今年度のFR出動回数は1回。2015年の発足以来6件の出動があった。年に2回の講習会を開催しているが、今年は、2回目に模擬出動訓練を行った。

隊員数は発足当初70人余であったが現在50人余に減っているため、新規隊員募集が次年度の課題である。

伊野消防団は今年度2回出動。(林野火災1件、建物火災1件)ここ数年、林野火災(野焼きによるもの)が圧倒的に多いので啓発活動を重視したい。

福祉・医療

1 高齢者福祉

市の健康福祉部と県立大出雲キャンパスの支援で介護予防教室(認知症予防)を19回開催した。参加者数が毎回、20~30人で盛会であった。

2 関係団体による問題点の洗い出し

出雲市社会福祉協議会安心支援センター主催で「伊野地区民生児童委員・福祉関係者意見交換会」が開催され(9月19日)、伊野に関わるケア・マネージャーや行政スタッフ及び地元の関係者が一堂に会して問題点を洗い出した。概要は「安心支援センター通信」(9月号)にまとめられており、伊野ビジョン作成事業にあたって貴重な資料となる。

医療については際だった進展はなかったが、前年度の重点に掲げていた島根大学医学部や県立大学出雲キャンパスとの連携や医療行政との協働について具体化を検討したい。